

下肢切断後の予後に関わる因子の検討

- 炎症及び栄養状態の関連について -

医療法人衆和会 長崎腎病院

○青柳 真生、下田 美智子、山中 真樹子、丸山 祐子、宮崎 健一、
李 嘉明、原田 孝司、船越 哲

【目的】

ASO や糖尿病性壊疽で下肢切断した透析患者の生命予後と、CRP や栄養状態の関連を調査した。

【方法】

対象は 1996 年～2011 年に下肢切断した患者で、男性 29 名、女性 11 名の計 40 名。調査項目は、1. 切断前安定期の CRP とアルブミン等栄養状態、2. 術前 1 か月以内での CRP 上昇率とした。

【結果】

下肢切断後の生命予後と有意な相関が得られたのは、術前 CRP 上昇率であり、20 倍未満で平均余命 1034.87 日、20 倍以上で 279.33 日であった ($t=0.013$)。安定期 CRP 及び術前 1 か月以内の最高 CRP とは有意な相関はなく、術前の栄養状態と生命予後も相関はなかった。

【結論】

今回の研究からは、術前の CRP の上昇率が生命予後に関与する最も強い因子であることが示唆された。切断前の宿主の全身状態よりも、壊死（壊疽）下肢の炎症の程度のほうがより強いインパクトがある可能性がある。